

○私たちと政治 (p 42)

「人間は () 的動物である (アリストテレス)

多様な人間関係 → 多様な立場 ex 宮城県人・鹿島台町民・大崎・多賀城・塩竈市民・鹿角生・〇〇君の友人・
〇〇部の部員・〇〇さんの息子・娘・孫 etc

大切なのは、「わたしは () である。」という意識。これによって北海道から本州・四国・九州・
沖縄に至るまで、「皆、仲間である。」という意識を持つようになっている。私たちは「国家」の中で生活している。

○私たちと国家 (p 42)

現代の国家の原型：今から300年ほど前、ヨーロッパで成立。絶対的権力を持っていた王が中心 (絶対王政)。

→ やがて市民 () で王が庶民に倒され、王に代わって庶民が中心となる国家が生まれた。

cf 市民

庶民の中でも、工場などを持ち経営しているお金持ちの人々。ブルジョアジーとよばれる。

↓

国家は、市民たちが協力して運営するようになった → 「政府」という組織を作る

(国家の役割)

1. 当初 (19世紀前半) の国家 ・ブルジョアジーは国家のはたらきをできるだけ少なくすることを希望

→ 国家の最低限の仕事とは：1. 犯罪者を取り締まる = () の維持

2. 外国に攻められたとき、自国を守る = ()

↓

それ以外のことを国家に求めない。これを () 国家もしくは () 国家という

2. 20世紀の国家 ・国家が積極的に国民の生活を保障

→ 国民一人一人の生活を国家が面倒を見る。これを () 国家もしくは () 国家という。

(小さな政府と大きな政府)

小さな政府 ・必要最小限のことしかしない

→ 政府の規制が少なく、国民は自由

→ ただし国民が困ったときも、政府はあまり助けをしてくれない。自己責任的な側面が強い。

大きな政府 ・政府が国民の生活に積極的に介入

→ 国民に対して、政府があれこれと口出しをする = 政府の規制が多い

→ 国民が困ったときも、政府が助けてくれることが多い。

問1 今の日本政府は、「小さな政府」だろうか、「大きな政府」だろうか。理由も考えてみよう。

問2 現代でも、企業を運営してお金をたくさんもうけている人たちは、小さな政府を望むことが多い。なぜだろう。

問3 逆に、貧しい人々にとっては大きな政府の方がよいといえる。なぜだろうか。

問4 オバマ前アメリカ大統領 (民主党) は、大きな政府をかかっていた。現在のトランプ大統領 (共和党) は小さな政府を主張している。このように今、政策が揺れ動いているのはなぜだろう。

1年 組 番 氏名

○近代国家の思想 (p 43)

国家は、我々を統治している (ex 法に違反した者を処罰する・税を払わせる・国によっては兵役を課す etc)。「統治」とは、時に強制的に国民を従わせることも意味する。私たちは、なぜ国家に従わなければならないのか？

(よくある答え) えらい人のいうことは聞かなければいけないから。

生まれてからずっとそうするのが当たり前になっているから。みんながやっているから。

いうことを聞かないと罰せられるから、しかたなく。

↓

ということは国家を動かしている「えらいひと」は、私たち庶民とは、ちがうということになる。「えらいひと」は私たちの上において、私たちは、そういう人たちの命令に従う存在でしかない…？
あれっ、人間って「平等」じゃなかったっけ？

問 我々が国などの指示に従わなければならない理由が「えらい人の指示だから」というのは、基本的にまちがいである。なぜそういえるのだろうか。

原始時代とかを思い浮かべてほしい。最初人間は平等だった。そして「自由に行動する権利」を持っている。これを自然権という。これはほかの誰かに与えられたものではない、生まれながらにして持っている権利。これはヨーロッパの思想のベースにもなっている。

問 「自然権」とは何だろうか。

自由に行動する権利を持っているのに、我々は国家には従わなければならない。なぜだろう。その理由について、3人の思想家が答えている。

☆現実の世界で、「自然権」と「我々を従わせる国家」は、相反するもののように見える。一体どうなっているのか。3人の思想家のテーマはこれだ。くわしくみていこう。

1. ホッブズ (英 1588~1679) 著書「リヴァイアサン」

人は「自由に行動する権利」を、無制限に行使する。かたんにいうと、みんなが“自分勝手”な行動に走る。すると、互いに恐怖の状態、いわゆる「()」の()に対する()になるとした。

そうならないようにするには、“化け物のような力”(リヴァイアサン)で人々を押さえつける必要がある。その怪物じみた力を持つものが「国家」であった。国家の強力な「統治」によってようやく平和が保たれる。ホッブズが想定した「統治」とは、当時絶対的な権力を持っていた王によるものであった。

みんなが、「自分勝手に行動する権利」=自然権を放棄して王に預け、治安を保つのがよいとした。

問1 ホッブズによれば、われわれが「自由に行動する権利」を使うと、どのような状態になると言ったか。

問2 問1は“恐怖の状態”である。当時強大な力を持つのは王であった。人々が王に望むのは何だろうか。

問3 なぜ私たちは王(国家)に従わなければならないのだろうか。

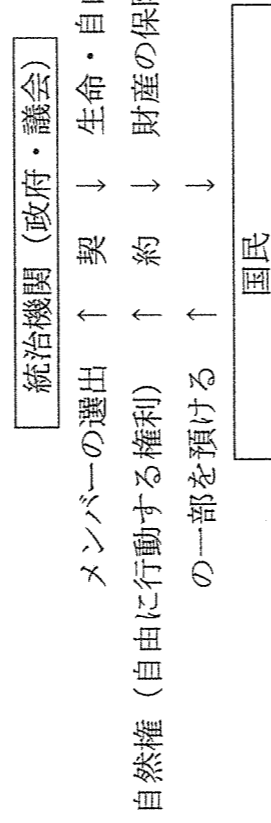
○近代国家の思想 (p 43 つづき)

2. J.ロック (英 1632~1704) 著書「統治二論」or「政府二論」

「人間は白紙(タブラ・ラサ)の状態で生まれる。」多くの人々は善良であるが、一部そうではない人々もあらわれる。そのため、国民の生命・自由・財産を守る組織やルールを皆でつくらなければならない。その組織が「政府」であり、ルールを作る場所が「議会」である。だから、「政府」や「議会」のメンバーは国民から選ばれる。

そして、みんなが政府や議会に対して「自由に行動する権利」の一部を預け、平和を乱す行為を取り締まってもらおう。かんたんにいうと、私たち国民は自由に行動する権利の一部をがまんして、自分たちを取り締まる権力を与えるから、安心・安全な生活を守ってね、という「約束」をしたということである。

この約束を「契約」という。もともとは神とおこなう、決してやぶってはいけない約束のこと。図にすると以下のようなになる。これを社会契約説という。



このように国民と国家は、やぶってはいけない約束 = () を結んだ！では約束をやぶったらどうなる？

1. 国民側

人々の安心・安全な生活をみだす行為 (一般に犯罪と呼ばれる) をしたのだから、国家によって処罰される。

2. 統治機関 (政府・議会) 側

人々を守るための組織である政府が、権力を悪用して人々を苦しめた場合、契約違反であるから、倒れてしまっ
てかまわない。これを () or 革命権と呼ぶ。この思想によって、イギリスの () 革命では
国王ジェームズ一世が処刑された。また植民地アメリカが本国イギリスとの戦争を決意し、イギリスを倒して独
立を達成した (アメリカ合衆国の成立)。これを () 戦争 (1776) という。

問 ロックによれば、なぜ私たちは、国家に従わなければならないのだろうか。

3. J.J. ルソー (仏 1712~1778) 著書「人間不平等起源論」「エミール」

原始、人間はもともと自由・平等だった。しかし、文明社会では、色々なルールに従わなければならなくなった。
このルールはどこからきたのか？文明社会において力を持った人たちが、自分たちに有利になるようなルールを
定めたのだ。文明社会が発達するほど、人々はこの“だれかが作った”ルールに動かされ、がんじがらめに縛り
つけられていく。ルソーはこれを「我々はいたる所で鎖につながれている」と表現した。

しかし社会ルールは、本来、特定の人々の利益を反映したもの (特別意思) であってはならない。またこのよう
な人々が集まって決めたことは、単に彼らの利益になるというだけだから、たとえ多数決によるものであっても、
社会にとつて本当に有意義なものであるとは限らない。ルソーはこれを () とよんだ。

こうした事態を避けるため、ルソーは、社会契約 (しくみはロックとほぼ同じ) による統治が必要であるとした。
ルソーは代表制を否定し、全員が政治に参加する、直接民主制を説いた。みんなで話し合い、個々の利益をこえ
た、本当に全員のためになるルールを定める。こうして決定されたものは () とよばれる。

1789年に始まる () 革命で、フランス人が叫んだのは「自由・平等をまもれ！」であった。

問1 民主主義のかたちには直接民主制と間接民主制がある。現代の日本はどちらか。

問2 ルソーによれば、「多数決」の結果が必ずしも正しいといえないのはなぜだろうか。